

サマータイムと会計測定

－ “正確” を求める測定と “合意” を求める測定－

於：ピッツバーグ
(1989年4月2日)

石川純治

1 はじめに

全米は今日4月2日からいっせいにサマータイムに入った。1時間だけ時計の針を進める。今朝8時に起きたと思ったのに、実はもう9時というわけだ。1時間も“損”をしたので、このタイムロスを経分でもカバーしてやろうと、「こうした制度はどこか会計の本質に通じるな…」と突然妙なことを思いながら起きた。もっとも、サマータイムが終わるときは、逆に1時間“得”をするわけだから、そんなよけいな考えをいただく方がよっぽどタイムロスかもしれないが。

2 時刻とは

時計の針を、自然現象の変化、つまり日中の自然時間が変化する様（端的には日の出・日の入り）に即して合わすなら、ある日突然、この自然時間が変化するわけではないから、日々刻々と時計の針を微調整するというのが（自然）科学的測定というものだろう。

しかし、そんなことをしては日常の社会生活は不便きわまりないにきまっている。それは、交通信号が毎日少しずつ変化するとどうなるかを想像すればよい。だから、ある一定の日、たとえば4月の第一日曜日の午前0時（推察されるように、日曜日を選ばれるには理由がある）を起点にして、いっせいに新しい“信号”に切り替えるわけだ。そこには自然現象と（社会的）信号制度との自然科学的な対応関係をつけることはできない。

たとえば、時計の針は今年午後8時（昨日までは7時だった）をさしているのに、ここピッツバーグは太陽がようやく沈みかけて赤く染まっている。日本でいえば夕暮れ時という感じだ。とても夜の8時といった感じではない。

すでに述べたように、時計が刻む時刻にはそうした自然の変化との厳密な意味で科学的・直接的な対応関係はない。サマータイムという信号が突然切りかわる時、そもそも時計が刻む「時刻とはなんなのか」というきわめて素朴な疑問が湧いてくる。とりわけ、こうした制度をもたない小さな島国で生活してきたものにとっては。

3 社会的 “信号”

自然現象、たとえば太陽の位置は、春と夏あるいは先月と今月とでは違っている。これ

は確かである。現に、日が次第に長くなってきている。

ところで、今日のお昼の12時（昨日は11時だった！）はあまり腹がすかない。だから、個人にとって時計がおかしくなったとって、もとの11時に戻すということはできないわけではない。しかし、社会的にはできそうもない。もし、太陽の位置と時間との一対一対応が必要なら、それを可能にする時間測定が望ましい。（社会的な）時を刻む時計は、そもそもそういう目的のために作られているわけではない。わけわれが日常使っている時計は、本来、社会的信号であるわけだ。それをあらためて知らせしむのが、（とくにその経験がない者にとっての）サマータイムというわけである。

4 記録・情報・制度

ところで、時計の針でもって太陽の正確な位置を知ろうとする人はまずいないだろう。しかし、あたかもそれをやろうとする人がいないわけではない。会計測定にかかわっている人がそうである。会計の世界においては、そうしたことを求める人が少なからずいるのである。会計というものの本質を考えるには、“正確”を求める測定と、“合意”を求める測定とを区別し、それぞれを求める背景に何があるかを理解することが大事になってくるように思える。

まず、正確を求める測定であるが、そこには「記録」という行為がかかわる。つまり、記録という行為の背景には、すでに起きてしまった事象があり、何が起きたかを知りたいとき、人は「記録がほしい」という。事象と記録との間に一対一対応をつけることが正確な記録ということになる。では、そうした記録は何のために行うかといえば、端的に言えば事実の「認定」と「管理」（コントロール）である。卑近な例で言えば、体重をコントロールするには毎日体重を記録することが必須であるし、毎日日記をつけることは自己反省、自己管理のための記録といえる。

次に、過去ではなくこれから起こるであろう将来事象を知りたいとき、人は「情報がほしい」という。つまり、過去事象に関する測定を「記録」といえば、将来事象の測定は「情報」ということになる。情報というものの背景には、これから起こるであろう不確かな事象があり、記録とちがって将来事象であるから、何が起こるか知りたい事象と情報との間に一対一対応をつけることはできない。それでも、できるだけそれ（完全情報）に近づけることが期待され、それに近いほど「信頼度」の高い情報ということになる。

では、そうした情報は何のために用いられるかといえば、いうまでもなく「予測」である。ただ、記録であれ情報であれ、そこに共通してみられる関係は、過去であれ将来であれ、「人」と（知りたい）「事象」との測定を媒介にした関係である。そして、その「人」が不特定多数であってもその関係にかわりはない。たとえば地震予測の場合、知りたい人が大勢いてその情報に「公共性」があっても、基本的に「人と事象」との関係にかわりはなく、それ以上のものではない。多数の投資家が株価の予測のために会計情報を利用する

といったことも、そのレベルでは地震予測と基本的にかわりはなく、それは一種の「あてっこゲーム」であり、(未来は神のみが知るとすれば)「人と神のゲーム」にほかならない。

5 制度の本質と会計：「人とモノ」と「人と人」

さて、ここでふたたびサマータイムという(人為的な)「制度」を考えてみよう。それは先に述べた管理のために正確性が求められる「記録」でもなければ、予測のために信頼性が求められる「情報」でもない。そこでは、時計の刻む針(測定値)がいかなる事象を示すかが基本的に重要なのではない。

重要なことは、人々が新しい時刻をきざむ時計の「仕組み」に合わせて行動するというところにある。たとえ午後5時の太陽がなお眩しく照りつけていても、みんながその時刻に合わせていっせいに仕事をやめるという「合意」をすることで、社会的協働がうまく機能する。そのためのいわば交通規制の「信号」の役割をしているのが、サマータイムという特定シーズン(それは地球の公転に起因する)に適用されるあらたな「24時間制」なのだ。ちなみに、1日=24時間から1年=365日という規約に目を移せば、4年に一度だけ特定の月(二月)が1日増えるという「うるう年」(leap year)制も、その基本は同じである。

こうした協働のための人為的仕組みは「制度」といわれる。「合意」というものの背景には、人々が個々勝手に行動しては成り立たない社会的営み(端的には「分業」と「協働」)があるわけだ。逆にいえば、そうした仕組みがないと、個々の人がどのような行動をとるかわからないという、いわば「社会的な不確実」がある。記録や情報が基本的に「人とモノ(事象)」の関係に根ざしているのに対し、制度は「人と人」の関係に根ざしているといえる。不確実性の観点からいえば、取引とか契約などの「人と人」との何らかの関係における不確実性に対処しようとする人為的仕組みが「制度」にほかならないわけだ。言うまでもなく、そこにおける人と人との関係は、たんなる人の集まり(大衆)ではなく、彼らが直接・間接に互いに社会的協働関係のプレイヤーとして社会的に組み込まれている社会的関係である。こうした社会的協働関係をうまく調整しコントロールしていく社会的信号装置が「制度」にほかならない。

会計の重要な機能はこの「制度としての会計」という側面なのである。ここに、サマータイムとは一見無縁な会計とがつながってくるわけだ。

6 「時差」(東西差)と「温差」(南北差)：多様性と標準化

ちなみに、サマータイムをとりあげるまでもなく、アメリカは西と東ではすでに3時間の時差を設けている。たとえば、ここピッツバーグの朝9時にカルフォルニアのバークレーに留学中の親友に電話しようとしても、そこはまだ早朝の6時なので電話はできそうも

ない、といったことになる。

時差は、自然事象（地球の自転に起因）からみれば緯度の違い（東西差）による時間制の調整である。ところで、日本は東西よりも南北の差が大きいという地理的特徴をもつ。沖縄では水泳が始まったのに、北海道ではまだストーブを炊いているというわけだ。となると、ここに経度の違い（南北差）によるなんらかの調整、ということが考えられてもいい。太陽の位置の違いを東西差でみるか南北差でみるかの違いはあっても、むしろ太陽と地球との自然科学的関係そのものは変わらない。なのに、制度としての対応が異なるのはなぜか。それはいうまでもなくわれわれ人間が東西差つまり時間を基準にして社会生活を営んでいるからである。もし、南北差つまり気温を基準にした社会生活が重要であれば、その南北差から生じる不都合に対処する制度が登場するはずだ。仮に、気温差によって寝起きする生物がいてしかも高度な社会性を有しているなら、おそらく「時差」と同じような「温差」なる制度が作られるにちがいない。

こうした東西と南北をそれぞれ軸にした「多様性」に対して、時を計る「時計」は社会生活を営むための前者にかんする「標準化」といえる。この（自然的）多様性と（社会的）標準化という本来矛盾する対立物を、うまく調整するのが「制度」であるといえる。会計の本質を考えるさい重要なのは、「記録」（管理）や「情報」（予測）に加えてこの「制度」の側面（制度性）なのである。とりわけ、資本主義が高度化した現代社会においてはそうである。

（以上、1989年4月2日）

〈付記〉

以上は、筆者がカーネギーメロン大学の客員研究員としてピッツバーグに滞在していた1989年、サマータイムという経験を1つの材料にして会計の本質機能について考えたエッセーです。暇つぶしの余興に書いたものにすぎませんが。

なお、不確実性への対処という観点からみた「制度」についてより詳しく知りたいひとは拙著『情報評価の基礎理論』（中央経済社、1988年）第10章を、また会計の①「記録」（レコーディング）、②「情報」（レポーティング）、③「制度」（インステチュート）の3つの側面（2つのRプラスI）については拙著『時価会計の基本問題』（中央経済社、2000年）の第12章（第1節）をそれぞれ参照してください。

（2003年3月）